

博士学位論文

内容の要旨および審査結果の要旨

2018年9月20日

京都橘大学大学院
看護学研究科

本号は、学位規則（昭和 28 年 4 月 1 日文部省令第 9 号）第 8 条の
規程による公表を目的として、平成 30 年 9 月 20 日に本学において
博士の学位（看博甲第 4 号）を授与した者の論文内容の要旨および
論文審査の結果の要旨を収録したものである。

目 次

【課程博士】

1. 谷口 由佳 博士（看護学） 看博甲第4号

学位論文題目：「意思疎通不可能な高齢者の終末期ケアに取り組む看護職を対象にしたより良い終末期ケアを目指すための教育プログラムの開発」

論文内容の要旨	4
論文審査の結果の要旨	7

氏名（本籍） ^{たにぐち}谷口 ^{ゆか}由佳 （ 兵庫県 ）

学位の種類 博士（看護学）

学位の記号 看博甲第4号

学位論文題目 「意思疎通不可能な高齢者の終末期ケアに取り組む看護職
を対象にしたより良い終末期ケアを目指すための教育プロ
グラムの開発」

学位審査委員	主査 教授	小板橋喜久代
	副査 教授	沼本教子
	副査 教授	梶谷佳子
	副査 准教授	松本賢哉

論文内容の要旨

論文題目 意思疎通不可能な高齢者の終末期ケアに取り組む看護職を対象としたより良い終末期ケアを目指すための教育プログラムの開発

Development of an Education Program for Nurses to Improve Terminal Care for Unresponsive Terminally Ill Elderly Patients

【研究の背景】

人口の高齢化に伴い、年間死亡者総数に占める高齢者の割合も高まり続けている。このような高齢多死の時代では、老年看護における終末期ケアが担う役割は大きく、高齢者がその人らしい最期を迎えられるよう、質の高い看護実践が求められる。

しかしながら、現代の高度な医療技術は、かつては治療困難とみられた患者を救命する一方で、回復の可能性を失い、意思疎通を図ることが不可能になった後においても生命が存続する状況を作り出した。医学的定義では、追視、発語及び手を握る等の反応があってもそれらに意味や認識が伴わない意思疎通不可能な状態を遷延性意識障害と呼称し、生命の質が極めて低く、単純に生きている、あるいは生かされているだけの状態と捉えられている（石井,1985）。看護職は、遷延性意識障害を抱えた高齢者に対し、経管栄養や喀痰吸引、体位変換等決められた看護行為を決められた時間に繰り返し行う中で、相対する高齢者の生きる意味をどのように見出せばよいのか、人生の終焉を迎えようとしている高齢者に一体何ができるのだろうかと疑問をもつようになる。先行研究では、こうした看護職が apathy へと陥り、バーンアウトに至る過程が示されている。看護職の心理的負担を緩和し、バーンアウトを回避するための支援策が必要である。

【研究目的】

意思疎通不可能な高齢者の終末期ケアに取り組む看護職を対象にしたより良い終末期ケアを目指すための教育プログラムを開発する。

【研究方法】

意思疎通不可能な高齢者の終末期ケアに取り組む看護職の体験を明らかにした本稿の先行研究（谷口・坪井・沼本,2014）から、教育プログラムの構成要素として「死生観」「ケア態度」「ケアの意義」「感情処理」の4つを抽出した。そして、これらの要素を基に作成した教育プログラムを用いて介入を実施し、その効果を評価した。教育プログラムは「より良い終末期ケアを目指すための態度の形成」を目的とし、全4回の構成とした。

研究デザインは1群介入前後比較デザインであり、介入期間は4ヵ月間とした。教育プログラムはグループ討議やグループワークを中心としており、研究者はその全過程において研究参加者の主体性を尊重した学習支援者という立場をとり、主にファシリテーターとして介入した。

介入効果を検討するために、教育プログラムの各構成要素の視点から「死生観」「ケア態度」「ケアの意義」「感情処理」を評価指標に設定し、それぞれ看護師の死生観尺度（岡本・石井,2005）、看護師の仕事意欲測定尺度（佐野・山口,2005）、ローゼンバーグ自尊感情尺度日本語版（桜井,2000）、日本版バーンアウト尺度（久保・田尾,1992）を用いて数量的測定を行った。また、量的データの意味を捉えるために、グループ討議における発言内容等の質的データも得た。評価時期は、介入前(第1回開始直前)、介入中(第2回終了直後)、介入直後(第4回終了直後)、介入2ヵ月後と定め、4時点における得点を比較するために反復測定による分散分析を行った。有意水準は5%とした。なお、本研究は京都橘大学研究倫理委員会の承認（承認番号15-14）を受け実施した。

【結果】

研究参加者は61名であり、4回全てに参加した40名を分析対象者とした。分析の結果、「死生観」では第Ⅱ因子「死の不安」($F=3.081, p<.05, \text{partial } \eta^2=.075$)、および第Ⅲ因子「身体と精神の死」($F=3.964, p<.05, \text{partial } \eta^2=.097$)に有意差がみられた。「ケア態度」では下位尺度「現在の仕事に向ける意欲」($F=4.554, p<.05, \text{partial } \eta^2=.110$)に有意差がみられた。「感情処理」ではバーンアウトのリスク別評価で「情緒的消耗感」の危険群($F=6.275, p<.05, \text{partial } \eta^2=.056$)、および「個人的達成感」の安全群($F=5.185, p<.05, \text{partial } \eta^2=.166$)に有意差がみられた。「ケアの意義」については、有意差はみられなかった。

【考察】

「死生観」については、看護師の死生観尺度の第Ⅱ因子「死の不安」と第Ⅲ因子「身体と精神の死」の有意な得点変化によって、意思疎通不可能な高齢者の生に対する否定的感情が緩和され、その生を精一杯全うすることに対する肯定感が高まったと考えられる。また、「ケア態度」については、看護師の仕事意欲測定尺度の下位尺度「現在の仕事に向ける意欲」の有意な得点変化によって、「ケア態度」の前向きな変容が促されたと考えられる。「感情処理」については、バーンアウトのリスク別評価において危険群のリスクが低減された。なお、「ケアの意義」については有意な結果は得られなかったが、参加者集団の属性が影響している可能性が高いため、再検証が必要である。

また、本研究によって得られた新しい知見として、「死生観」について先行研究（谷口他, 2014）では、意思疎通不可能な高齢者の終末期ケアに取り組む看護職は高齢者の生を否定的に捉えてしまうという結果を得ていたが、今回の介入の結果、看護職自身の死への不安が

その原因であるという可能性が見出された。さらに、意思疎通不可能な高齢者の終末期ケアに従事する看護職の仕事意欲は、看護の質の追求や自己成長心といった仕事に向ける将来的な展望が現在の仕事意欲を支え、現在の仕事に対する継続性ややりがい、興味等に向ける思いが意欲の低下を抑止している可能性が見出された。

【結論】

本研究は、意思疎通不可能な高齢者の終末期ケアに取り組む看護職を対象にしたより良い終末期ケアを目指すための教育プログラムの開発を目的とし、教育プログラムを作成して介入を実施し、効果を評価した。介入効果の指標として「死生観」「ケア態度」「ケアの意義」「感情処理」を設定し、自己報告式尺度を用いた数量的測定により評価した。

その結果、「死生観」および「ケア態度」で有意な変化がみられ、死生観の深化及びケア態度の前向きな変容が促された。「感情処理」では、バーンアウトのリスク別評価において危険群のリスクが低減された。「ケアの意義」については有意な結果が得られなかったが、参加者集団の属性が影響している可能性が高い。以上のことから、本研究で開発した教育プログラムは、より良い終末期ケアを目指すための態度の形成に有用と言える。

論文審査の結果の要旨

本学位請求論文は、意思疎通不可能な高齢者（認知症高齢者を含む）の終末期ケアに取り組む看護職を対象にした、よりよい終末期ケアを目指すための教育プログラムを開発し、その効果について検証した論文である。以下、本学位請求論文について審査委員が評価した点を述べる。

第一に、研究課題の持つ社会的重要性と緊急性を背景として、研究者の老年看護学への視点が研究動機となっている点に独創性が認められる。我が国における高齢者人口の急速な増加が続いており、その結果として高齢多死の時代ともいわれる現実を生み出している。そうした中で、意思疎通が不可能になった状態で終末期を迎える高齢者のケアにかかわる看護職の抱える課題が複雑さを増している。生命の尊厳と生活の質の確保を維持するケアに取り組みつつも、本人の望むあり方の確認の困難さや不可能な状況に加えて医療的なニーズへの対応の問題も含み、対応の難しさをもたらしている。そこで、意思疎通不可能な高齢者のケアに取り組む看護職を支援するための教育プログラムの必要性があると判断し、その開発に取り組むとともに、その効果についての検証を行った。

第二に、開発した教育プログラムは、臨床の実態から抽出された独創性のある内容で構成されている。研究者が先行研究で明らかにしてきた、意思疎通不可能な高齢者のケア（研究者による用語の定義では「意思疎通不可能な高齢者がその人らしい最期を迎えるために必要なケア」）に取り組む看護職の抱える苦痛や困難さについての実態調査の結果を再考しなおすとともに、国内外の文献検討の結果を踏まえて、教育プログラムの構成要素を抽出した。抽出された4つの構成要素（死生観、ケア態度、ケアの意義、感情処理）は、現実の臨床の課題を反映しており、本教育プログラムの柱となっている。この4つの構成要素の教育プログラム上の位置づけを見ると、「死生観」は、看護職自身及び高齢者の生命の尊厳について内省する機会となり、ケアの質に反映されるものである。「ケアの態度」は、ケアへの信念の表れでありケアの質に反映されるものである。「ケアの意義」を見出せる機会を作ることで、意思疎通が図れない対象者とのケアの関係において、このプログラムを通して、実施しているケアの意義を共有し合える。「感情処理」の場あるいは機会を設けることは、感情的な負担を減らし意欲を高めることに貢献するとともに、バーンアウトを抑止する効果があると位置づけられた。

第三に、本教育プログラムの展開は、4か月間に4回の学習会・検討会を開催するように組み立てられている。本教育プログラムの有効性を検証するために、4つの施設（療養

病床及び介護医療型医療施設)の協力を得て、意思疎通不可能な高齢者の終末期ケアを日常的に経験している看護職を対象に臨床研究を行った。開催時期に合わせて4つの構成要素を検討するための課題を設定して、プログラムへの理解と看護職の認識および態度の育成が、段階的に深化していくように運営された。運営責任者及びファシリテーターは研究者自身とし、看護職の気づきと主体的なディスカッションを促すことを目指して、KJ法を用いるなどしたグループワークにより進行した。研究協力者61名のうち、4回のプログラムに全参加した40名を対象に分析した結果、①「死生観」は、岡本らによる「死生観尺度」を用いて評価した。下位尺度である「死の不安」「身体と精神の死」に有意差が認められた。具体的項目として「自分が死ぬことへの不安」が減少し「意思疎通ができなくても生きていることは大切」の項目が上昇した。②「ケア態度」は、佐野らによる「看護師の仕事意欲測定尺度」により評価した。下位尺度である「現在の仕事に向ける意欲」「将来的な仕事に向ける意欲」に有意差がみられた。③「ケアの意義」は、桜井の翻訳による「ローゼンバーグの自尊感情尺度日本語版」を用いて評価したが、有意差は認められなかった。④「感情処理」は、久保らによる「日本語版バーンアウト尺度」を用いて評価した。介入前の状態から群分けした危険群において「情緒的消耗感」が減少し、安全群において「個人的達成感」が上昇した。4つの構成要素のうち3つの要素に有意差が認められ、本教育プログラムの有効性が検証された。

第四に、本研究の総合評価と将来的な課題(汎用性を高めるために)

本研究で開発した教育プログラムは、臨床の看護職の抱える課題をもとに独自に開発されたものである。それに加えて、プログラムを用いた臨床研究によりその有効性を検証した。一部の尺度において有意差が明らかにならなかった項目も見られるものの、意思疎通不可能な高齢者のより良い終末期ケアを目指した看護職の支援のためのツールとしての有効性が検証された。本研究における研究課題の独創性、研究プロセスにおける一貫性および整合性が認められる。よって、本論文は、博士(看護学)に該当するものと評価した。

なお、将来的な課題として次の点が指摘された。臨床研究の結果に示されたように、一部の評価尺度の見直し、臨床の実務者が参加しやすいプログラムの運営方法の工夫と検証の積み重ねにより、プログラムの有効性と汎用性を高めることが望まれる。

なお、論文タイトルおよび構成において、教育プログラムの開発とともに臨床での検証を行ったものであることを示すような適切な内容の記述および表現の工夫が求められる。

本学位請求論文提出者に対して、2018年7月31日、本学内において審査委員4名が本学位論文の請求内容とそれに関する事柄について口頭試問を行った。

審査委員4名とも高い評価をもって本学位請求論文を合格と認めた。

博士学位論文 内容の要旨および審査結果の要旨

発 行 2018年10月12日

発行者 京都橘大学大学院 看護学研究科

607-8175 京都市山科区大宅山田町